4.5. 関連資料

以下の資料を収録した。

布村麗泉作品一覧
小西俊雄作品一覧
ちらし（英語版、日本語版）
「日本書画三人展」経時記録（書部門）
日本書画三人展「書」部門記録 目次
同「記録」抜粋
———「日本書画展」に参加して——— 布村恭子（麗泉）
結びに代えて ———張り合いと「書展」———

布村麗泉作品一覧

1. **「夕陽千樹鳥声寂　涼月一夜花影深」**漢詩。行書。作者不明。
   多くの木々を照らしている夕陽に似て、鳥の声は寂しげであり、庭いっぱいにさす月の影は涼しく花影も深いようだ。

2. **「夕光のなかにまぶしく花みちて　しだれ桜は輝を垂る」**
   佐藤佐太郎。
3. **「たんぽぽを踏みしと思ふ夜の径」**山口青邨。
   （私製記念歴四月参照）
4. **「始建国天鳳元年玉門大煎都兵完堅折傷簿」**木簡。隷書。
   前漢、前一世紀。
   意味不詳。天鳳元年に建国時の負傷兵の名簿か。
   （私製記念歴十二月参照）
5. 権量銘。篆書。秦。前三世紀。
   始皇帝の権力のもとに度量衡が統一され、官製の原器を民間に配った。それに刻まれている文字。
   （私製記念歴十一月参照）
6. **「華・華・華」**　花束の意を示す連字。
7. (Not displayed)
8. **「星」**創作。中国古文の字体を図案化。（私製記念歴二月参照）
9. **「えーでるわいす」**創作。蝋書きで。（私製記念歴八月参照）

10. **「舞」**創作。紫キャベツの汁で。
11. **「鳴」**創作。お紅茶で。
12. **「落ち葉」**原作 Paul Verlaine。上田敏訳。（私製記念歴十月参照）
13. **「ふるさとの」**原詩三木露風。（私製記念歴五月参照）
14. 和漢朗詠集から。平安時代、11 世紀。伝藤原行成。（私製記念歴表紙参照）

15. (Not displayed)
16. **「和敬清寂」**茶道精神を表す禅語。「和」「敬」は客と亭主の間、「清」「寂」は茶器・茶室の状態。
    （私製記念歴三月参照）

17. 寸松庵色紙。平安中期、11 世紀。
18. **「佐支み遅てこぼるる花茂那可りけ利」**作者不明。
19. 短冊四点。創作。（私製記念歴七月参照）
    - 飛ぶ鮎の底に雲ゆく流れ可那 (上島鬼貫)
    - 春の日や庭に雀の砂あびて (上島鬼貫)
    - 木蓮の軒くらきまで咲きにけり (原石鼎)
    - 山路来て何やらゆかし菫草 (松尾芭蕉)

小西俊雄作品一覧

21.「露」法語。臨書。目前の事々物々の上に真実は堂々と現れている。（私製記念歴六月参照）

22.「日新月新又年新」創作。座右銘。原典は「日新日新又日新」（大学）。（私製記念歴一月参照）

23.「福如雲」臨書。原詩昭徳皇后。詩意は「雲の湧き出でるが如き幸せ」。

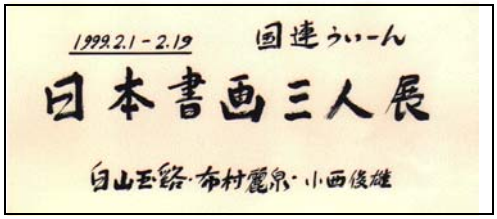
24.「東海の小島の磯の白砂に吾泣きぬれてかにと戯る」創作。原詩石川啄木。（私製記念歴九月参照）

25.「魚不出淵国之良幹乗愛在民」臨書。原典張遷碑（第三段）、後漢、二世紀。「（陳留己吾の人、張遷公は）魚が淵から姿を見せぬようにひかえめであった。国に役立つ立派な才能は愛情を人民に注ぎ（あの盛んな甘とうのように彼らから慕われた。――ー）」

26.「鳴鳳在樹白駒食場化被草木」臨書。原典智永千字文。隋代か。「天下が良く治まれるときは、鳳凰が梧桐の木にとまり、明君が上に在りてよく人材を用いるときは、在野の賢者が駒に乗って君の所に至り、乗ってきた白い馬が牧場で若葉を食らう。明君の徳の及ぶ所は、ただ人のみにあらず、あまねく地上の一木一草に至るまでみなその所を得、その幸福は国外までも及んだ。」

Art Exhibits --- Japanese Paintings and Calligraphy, 1-19 February 1999 ---

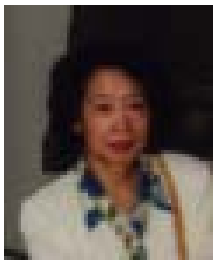
(with cooperation of VIC Art Club)



Mrs. Gyokkei (Michiko) Shirayama (Paintings),
Mrs. Rei-sen (Kyoko) Nunomura (Calligraphy), and
Mr. Toshio Konishi (Calligraphy)

We are looking forward to your visit.

Mrs. Gyokkei (Michiko) Shirayama



Born and raised in Yokohama, Japan. After completion of study in literature at Keio University her interest extended more toward artwork.
During the period of 1979 to 1993, she studied Japanese New Sumie Art at Suka Art Institute in Yokohama with Master Gogodo Suka and became a registered active member of Bokuyokai.
As a member of Bokuyokai Artist Association, she has been participating in a group exhibition every year at the Mitsukoshi Art gallery and also during exhibitions held in Holland in 1988, and in France in 1989 under the sponsorship of the European Community.
Since 1993 she lives in Vienna accompanied by her husband, Dr. S. Shirayama, a staff member of the Agency.

Mrs. Rei-sen (Kyoko) Nunomura

lives in Yokohama, Japan. She studied at the Ochanomizu Women's University in Tokyo. While working as a high-school teacher, she studied calligraphy at the Naniwazu Calligraphy School in Tokyo with Calligraphy Master Houshun Noda since 1974 to 1979, and at the Contemporary Calligraphy Association with Master Touka Okada since 1990. After receiving Special Awards at the Contemporary Calligraphy Exhibition for three consecutive years, she was nominated in 1998 as a judge (examining staff) for the Exhibition by the Contemporary Calligraphy Association.

Her career is honoured with awards at the following exhibitions:

- 1978 Selected for the award at the Mainichi Calligraphy Exhibition
- 1992 and 1993 Awarded for the excellence work at the Contemporary Calligraphy Exhibition
- 1993 and 1994 Awarded for the excellence work at the Lifework Art Exhibition sponsored by the Japan Broadcasting Corporation (NHK)
- 1994 and 1995 Encouragement Award at the Contemporary Calligraphy Exhibition
- 1996, 97, and 98 Special Award at the Contemporary Calligraphy Exhibition

On the first day, 1 February 1999, from about 5pm she will demonstrate calligraphy.

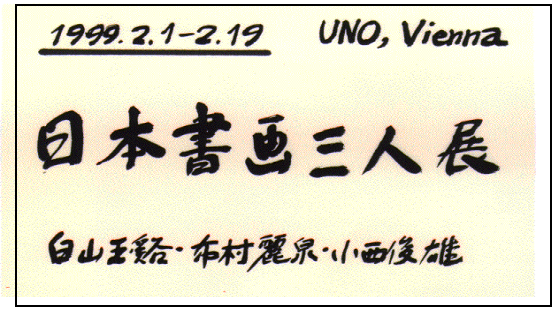
Mr. Toshio Konishi is a staff member in the IAEA since 1995. He studied nuclear engineering at the

University of Tokyo and has worked as a nuclear engineer. He studied calligraphy since 1990 in Tokyo at the Saisho-ji Calligraphy School with Master Shi-sen Mikumo to the level of "First Kyuu" and privately with Mrs. Rei-sen Nunomura until he came to Vienna. He has no established record as a calligrapher, but he loves it and he coordinated this exhibition. He is also well known as a mountain hiker and a Toastmaster among friends.

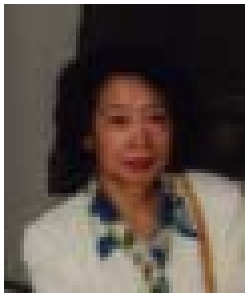
国外にいても忙しさを感ずる年の瀬です。皆様ご健勝のことと存じます。この暮は日本で迎えます。明年も引き続きのお付き合い宜しくお願い致します。今年は念願の Grossglockner 登頂を果たす一方で初の入院生活も経験し、健康の有り難さを再認識しました。ウィーン生活後半を迎え明年も良い思い出を貯めたいと思います。皆様にも平和な年であります様に。
これを機に下記「日本書画三人展」を案内させて頂きます。恥ずかしながら「書」で参加します。なお、初日夕刻展示場にて簡単なパーティと、私の日本での書仲間・師である布村麗泉さんの実演を計画中です。お運び下さい。

1998-12-22　　小西俊雄　Greinergasse 42/1, 1190 Wien, Austria

―― 日本書画三人展 ――



・会場：国際連合機関ウィーン地区本部内展示場（A塔一階）
・期間：１９９９年２月１日（月）－２月１９日（金）
・出品者：
　白山玉谿（通子）：「絵」。
　布村麗泉（恭子）：「書」。
　小西俊雄：「書」。



白山玉谿（通子）：「絵」。

慶応大学にて文学専攻。以後、芸術に転ず。1979 年－1993 年、横浜須加五々道美術協会にて墨絵を学ぶ。墨瓔会会員。三越芸術ギャラリーの墨瓔会展に毎年参加の傍ら、オランダ(1988 年)、フランス(1989 年)で開催された欧州共同体(EC)主催の展示会に招待参加。1993 年からウィーン在住。IAEA 白山新平氏夫人。

布村麗泉（恭子）：「書」。

お茶の水女子大学卒業。現在女子高校教員。東京なにわず書芸社野田萠春師(1974－1979)、現代書作家協会岡田櫂歌師(1990－)に師事。現代書作家協会所属。現在、現代臨書展審査参与。

1978　　毎日書道展入賞
1992, 1993　現代臨書展秀作賞
1993, 1994　日本放送協会(NHK)生涯作品展秀作賞
1994, 1995　現代臨書展奨励賞
1996-1998　現代臨書展特別賞

なお、初日２月１日（月）夕刻会場にて実演を予定。

小西俊雄：「書」。

1995 年より IAEA エネルギー局勤務。東京大学にて原子力工学専攻。1990 年から 1995 年まで、東京最勝寺三雲紫泉師に学ぶ。全日本書芸文化院認定一級。無所属。書家としての実績はないが、書を愛し、趣味とし、本三人展を企画。登山の趣味を知る人も多い。

「日本書画三人展」 経時記録（書部門）（1998 年 3 月－1999 年 10 月）

1998/3/4日本人会で「絵と木彫り展」企画（白山、猪川）情報、「書」参加を申入れ。

1998/3/8布村麗泉（恭子）さんに「書展」招待参加の打診。

1998/3/21　麗泉「書展参加前向き検討」の答で具体案検討に入る。小西も参加の方向。

1998/3/31　会場写真麗泉へ。展示点数等概略の構想相談に。展示面大中小各 2,6,1 面で計画。

1998/4/12　麗泉「書展」参加確定。展示時期調整へ。年内不可能で猪川の「木彫り」断念。

1998/5/26　展示会時期確定（1999/2/1-19）。同時に麗泉来墺予定暫定（1999/1/31-2/6）。
展示会までの小西側準備概略工程検討（制作、表装、広報計画等）。

1998/7/2　布村麗泉への正式参加依頼状発送 (7/6 付け)。その足で Grossglockner へ(登頂 7/6)。

1998/8/7　小西候補作品写真を麗泉へ。

1998/8/31　「ちらし (英独日)」作成に着手（小西）。表装候補数点を東京へ。

1998/9/9　麗泉より「実演」の提案届く。入院中に構想練る（小西（9/9-18））。

1998/9/21　麗泉より試作品写真届く。「あと一ヶ月」と双方で詰めの作品作り。

1998/10/19　小西作品四点、麗泉へ表装依頼。広報活動に着手。展示面大中小各 2,7,1 面で確定。

1998/11/24　VIC Toastmasters Club で PR ｽﾋﾟｰﾁ ”ABC of Calligraphy”（小西）。

1998/12/10　東京で表装完成（確認は麗泉）。この頃から「ちらし」随時配布（小西）。

1998/12/31　UNO 職場誌 ECHO (No.200) に PR 記事掲載 ”Painting with Writing” (小西)。

1999/1/5　麗泉来墺旅程確定（1999/1/30-2/5）。実演方法、具体的展示案等概ね最終協議。

1999/1/6　表装済み作品航空便にて Wien へ発送（麗泉）。

1999/1/16　麗泉滞墺中日程等相談（作品配達 1/18、Wien へは 1/11 到着済み）。

1999/1/21　展示場レイアウト、パーティ段取り等白山と最終調整。

1999/1/28　外部からの初日参列者名簿届け出 (日本人学校関係者は 1/31)。

1999/1/30　作品搬入、仮配置。麗泉夫妻夕刻来墺、会場一見。

1999/1/31　麗泉夫妻と展示準備（麗泉 17 点、小西 6 点）。快晴。一方で絵の白山。

1999/2/1(am)　会場確認、国連内案内、広報資料収集。(pm)UNIDO 滝沢氏訪問、実演準備。
1999/2/1　(pm)　五時ｵｰﾌﾟﾆﾝｸﾞﾊﾟｰﾃｨ、実演約 2 時間（小西・一般参加・麗泉の順）。
観客５０余名。喜んでくれる仲間、麗泉に感心する観客。最後に希望者に色紙。

1999/2/3　麗泉、UN Women’s Guild 訪問、「作品売上金を国連に寄付を」。最終手続きは小西。

1999/2/5　麗泉夫妻帰国。雨風の中離陸時のみ快晴。

1999/2/15　玲子さん夫妻、展示会のため香港より来墺。

1999/2/19　展示会終了。作品購入希望は麗泉作品二点、小西作品一点。

1999/2/20　作品撤収。麗泉作品日本へ返送(2/22、到着 2/28)。

1999/2/26　作品売り上げ金寄付手続き（UN Women’s Guild）。麗泉 7000ATS,小西 3000ATS。

1999/6/1　「日本書画三人展」書部門記録（初稿）。

1999/6/30　語学教室 Journal に報告記事 ”Ausstellung japanischer Kalligraphie”（小西）。

1999/7/5　「作品を来年のカレンダー図柄に」と現地法人 (Takeda Pharma) より申し入れ、麗泉了承。

1999/7/16　「カレンダー」計画 Takeda Pharma より取り消し連絡、残念。

1999/10/15　「日本書画三人展」書部門記録完成。

日本書画三人展「書」部門記録 目次

はじめに
1. 書画三人展ちらし（英語版）
2. 展示作品（一覧及び写真）
3. 会場での展示作品と作者と
4. 書実演プログラム、実演風景とオープニングパーティ写真
5. 書部門経時記録
6. 国連児童福祉活動への寄金感謝状（United Nations Women's Guild）
7. 「日本書画展に参加して」 布村麗泉（恭子）
8. 結びに代えて ——張り合いと「書展」—— 小 西 俊 雄

9. 関連資料（別冊）
01. 「三人展」ちらし（英独日版）
02. 布村麗泉参加依頼状
03. トキワ松学園中学宛て「書展」参加届書（布村麗泉）
04. 布村麗泉参加感謝状
05. Certificate of Contribution (United Nations Women's Guild)
06. Toastmasters Club Speech "ABC of Calligraphy" (1998 年 11 月)
07. UNO/Wien 職場誌 ECHO に 解説記事 "Painting with Writing" (1998 年 12 月)
08. ART Club NEWSLETTER (1999 年 1 月)
09. 国連関係者以外の初日参列者リスト
10. 展示会反響の一部（文書にて着信分）
11. 関連写真（国連内外）
12. 語学教室 Journal "Ausstellung der japanischen Kalligraphie" (1999 年 7 月)
13. 絵画部門作品（白山玉谿）写真
14. その他

―――「日本書画展」に参加して―――

布村恭子（麗泉）

ウイーン在住の小西さんから、「国連で書展をやりませんか」という思いがけないお手紙を頂いたのはまだ春も浅い頃でした。ちょうど息子の邦弘一家が来宅している時に届いたので皆で大騒ぎして拝見しました。細々と書を続けているとは言え、勤務のかたわらでもあり、とても世に問うような実力があるとは思っていません。とんでもないことだと思ったものの、「真面目に考えてください」との言葉に考え直し、可能かどうかともかく書作のアイデアを練ってみることにしました。

外国でのことですし、展示面での構成の変化を工夫したいと思い、淡墨のにじみを生かした少字数の作、現代詩、軸装の短歌、俳句、英語・ドイツ語を墨で表現しーーなど考えている内に楽しくなり、見通しがついて来たように思えて来ました。できれば一生に一度は個展をーーと漠然と考えていたこともあり、その夢がウイーンの国連展示場を舞台として実現するのならこれは願ってもないチャンスかも知れないと心を決めてウィーンに連絡したのは一ヶ月位経った頃でしょうか。書の岡田櫂歌先生も喜んで相談に乗りましょうとおっしゃってくださったのは心強いことでした。

勤務先の学校に影響の少ない時期をとお願いしましたが、結局会期は二月初旬とのこと、しかし校長先生から「勤務免除の扱いにして応援する」との快諾を得て、遂に正式に参加を決意するに到りました。ウイーンから正式の招待状も到着しました。それからは題材を探し、字体を考え、試作を重ねて大変充実したワクワクと心弾む日々でした。「こんどこんな作品ができた、次はこんな構想を考えている」と香港にいる娘玲子に報告し、その都度喜んでくれて張り合いのある楽しい数ヶ月を過ごすことができました。

夏にお茶の水大のクラス会で計画を発表したところ、皆さん喜んでくれ、ウイーンには和服を着て行きなさいね、とか、会場で是非デモンストレーションをするといいわよなど、いろいろ言われて、つい小西さんに実演のことをもらして結局恥ずかしくも決行！することになったのはよかったのか悪かったのか。時に蛮勇を振るうことがあるのは慎まなければと反省しています。

秋になり、作品が揃い表装も完成。清雅堂の若いすてきな有川さんがそれぞれの雰囲気に合わせて表装の材質、色合いを工夫してくださり、拙い作も見違えるように生命をもらい、感動しました。寸松庵色紙の軸を開いたときにあふれ出た薄紫の気品あふれる香気は忘れられません。年があけて作品を発送し、渡墺の日が近づいて来ました。外国への一人旅の経験はなく心配していた処、夫が同行してくれることになったのはありがたかったと思っています。

会場では、小西さんの伸びやかな書、白山さんの細緻な美しい絵と並び、力不足で恥ずかしい気もしましたが、皆さんの暖かい言葉に励まされる思いがいたしました。初日のオープニングには国連大使をはじめ、国連アート・クラブのメンバーの方々、各国の国連職員の方々など大勢の方が来場してくださいました。英語での作品紹介を会場で終えたあとの実演は小西さんの即妙な司会進行でスタート、初めは緊張で筆を持つ手も震える思いでしたが、次第に表情も手もほぐれてきたように思います。そこで書いた淡墨の作品、色紙類などをお客様が喜んで持ち帰ってくださり、嬉しいような申し訳ないような複雑な気持ちでした。

日本文化紹介を通じての国際親善、国際交流という目標にどの程度到達出来たか疑問ですが、私個人にとっては希有な経験であり、得難い想い出となりました。このような企画を準備し、現地での諸手続きを引き受けて開催までこぎつけてくださった小西さんに感謝しています。

結びに代えて ———張り合いと「書展」———

私の職場に「日新月新又年新」の字が掛けてある。拙い自書だが気に入っている。原典は勿論、「日新日日新又日新」（大学）である。張り合いを持って「日々に月々に年々に新たなり」が最近の私の座右銘である。「張り合いの持てる人生は素晴らしく、ありがたいことです。仕事であれ、趣味であれ、人であれ、、。」　近年、知人宛に書いた言葉である。「張り合い」とは何か。どんな境遇にあるにしろ、それがあるから努力の活力が出る、向上心が生ずる、希望が持てる、人生に喜びを感ずる、そんなものではなかろうか。人それぞれで形は違うだろう。違うだろうが、「張り合いの持てる人生は素晴らしく、ありがたい」、心からそう思う。

四年前からウィーンの国際原子力機関 IAEA で「真水」の仕事に携わって来た。原子力機関で「水」とは奇異に響くかも知れない。それは「水」の問題に原子力が貢献できるかと言う取り組みであり、私が日本の原子力開発の中で育ったからで、人類全体の身近な問題に国連機関で経験が生かせることに張り合いを感ずるのである。

前置きが長くなってしまった。「真水」の問題が仕事の張り合いとすれば、「日本書画三人展」を催すことが出来たのは趣味の上での張り合いであった。企画着手からほぼ一年、ウィーンのアパートの二枚の畳で師のないまま作品に苦労するのも、アートクラブの事務局や他の二人の出品者との Coordination も張り合いであった。もう一つの趣味である登山(Grossglockner, 3798m, 98.7.6)や思いがけない入院(耳下腺腫瘍除去手術 98.9.9-18)と重なって忙しくもあったが、終わってみれば張り合いのある楽しい一年だった。

寺子屋時代の三雲紫泉先生には手紙で朱を入れて頂いた。表装をお願いするため秋に作品を麗泉さんに送ったら、意外にも誉めて頂いて感激もした。趣味を兼ねて作った英独日三カ国語のちらしや英語クラブでの広報スピーチ、職場誌への解説記事投稿等、何れも楽しく進めることができた。展示初日に集まってくれた Hiking Club や Toastmasters Club の多くの仲間が作品を見るのみでなく実演にも参加して楽しんでくれた。張り合いは実を結んだと思った。あらためて「張り合いの持てる人生は楽しい」と思った。

私としては質量共に限られた作品での参加ではあったが、個人レベルでの文化交流と言う目的は多少なりとも達成できたと思うのは自画自賛か。会場外で聞こえてくる声も好意的だった。「展示を見た、素晴らしかった」と後日声を掛けてくれた見知らぬアメリカ婦人、「13 番のイラスト入りの詩が良い」と言ってくれた日本人幹部、「『露』を自分にも追加で書いて欲しい」と言ってきたオランダ人、「変化のある色の墨が面白い」と話し掛けてくれた地元のオーストリア人、また、初日にもらった色紙にお礼の e-mail をよこしたフランス人、ロシア人等等。その中には、作品の購入希望もあり、麗泉さんの趣旨で、売上金は世界の子供たちのための国連活動に全額寄付をした。

布村麗泉さん夫妻には有職の身でありながら遠路来て頂いて心から感謝している。芸術に縁のなかったこの自分に素晴らしい思い出が出来たと喜んでいる。　　(99-06-01　小西俊雄)